

## 巻頭言

## 電子化時代の精神神経学雑誌

大森哲郎 日本精神神経学会理事  
Tetsuro Omori

精神神経学雑誌の編集委員長を2017年10月に拝命した。本誌の現時点の編集委員会は企画や査読を担当する19名の編集委員および編集庶務を担当する10名の編集事務局員から構成されている。編集委員はバックグラウンドがさまざまな全国各地の中堅以上の精神神経学会会員が、そして編集事務局員は主として在京の比較的若手の会員が務めている。編集委員会一同とともに、これからも良質な雑誌をお届けできるよう尽力したい。

本誌は2014年から大きく舵を切って、電子ジャーナル化に踏み切った。これには経済的な背景もある。会員1万7千余名に毎月冊子をお届けするためには、郵送費だけでもかなりの年間予算を必要とする。電子ジャーナル化すると印刷代も合わせて相当の節約になるのである。現時点でおよそ1万名の会員が冊子版ではなく電子版を選択してくれている。今後ともできるだけ多くの会員に電子版を利用していただくとう会費財政的には助かることになる。もっとも電子ジャーナルなど読む気になれないという会員がいるのもわかる。そのため冊子版を選択することもできるようになっている。

もちろん電子化したのは経済的な事情だけからではない。いくつも利点があるのである。なかでも会員に便利なのは検索機能だ。例えば最近話題になっている自動車運転の問題に関して、本誌に発表された論文を探すとして。そのためには学会ホームページから本誌のページに入り、論文検索キーワードに自動車運転と入れるだけでよく、すると2017年の4本の特集論文、2016年の教育講演、2013年の巻頭言などが瞬時に立ち現われ、いずれも全文をすぐさま閲覧することができる。図書館や図書室で各巻ごとに巻末の索引をあたらなければならなかった電子化以前とは

様変わりしたわけである。学会ホームページを経由せずにいきなりGoogleやYahooの検索窓口に精神神経学雑誌と自動車運転と2つのキーワードを入力してもほぼ同じ論文が取り出せる。

会員の利便性とは直接関係はないが、社会的意義が非常に大きいのは、電子化に伴って本誌の論文を会員以外にもWeb公開したことだ。電子書籍KaLibを通じて誰でも1論文ずつ購入可能となっている。電子化以前の論文に関しては、2013年から2007年まで遡ってプライバシーを含む症例提示のあるものを注意深く除いたうえで無料公開している。かつて本誌のバックナンバーは、大学や病院の書庫や会員の書棚に並んでいたものであり、限られた人達しかアクセスできないものであったが、今では広く医学、保健福祉、心理、看護などの関係者や患者・家族など誰でもがインターネット上で閲覧することができるようになっている。本誌に発表された優れた研究論文や資料、論考が、広く市民と共有できるようになったことは、本学会の社会的使命からみて重要なことである。なお、雑誌論文の電子化とWeb公開は内外の主要学会の動向だ。専門施設の図書室が特権的な知の殿堂であった時代は終わり、インターネット上での情報共有の時代となっているのである。

言うまでもなく電子版には利便性と裏腹に弱点もある。手に取ってこそその雑誌だというご意見は心情的には理解できる。新着の冊子をパラパラと繰る楽しみには代えがたいものがあるし、思わぬ記事との出会いもある。電子版では新着の知らせを受けても、ついつい閲覧は後回しになりがちだ。毎号さっそく開いてみたくなる雑誌作りをめざしたい。会員諸兄のご助言、ご意見、そして何よりも積極的なご投稿を心からお願いする。